

◎ 着任教職員紹介その23

金子亜美助教

国際学科所属の金子先生が、本年10月1日付で着任されました。

- ①氏名（英文表記）：金子 亜美（KANeko Ami）
- ②専門：文化人類学
- ③前職：東京海洋大学、東洋大学非常勤講師（スペイン語）
- ④趣味：映画鑑賞
- ⑤自己紹介：

初めまして。千葉県出身の金子亜美と申します。栃木県は幼少期の主な旅行先のひとつでした。宇都宮での暮らしがどのようなものになるか、わくわくしています。私の専門は文化人類学で、特に南米に暮らす先住民のキリスト教化の歴史を研究しています。南米の先住民というと、地球の裏側に住む遠い人々と感じられるかもしれませんが、ですが日本もまた、フランシスコ・ザビエルをはじめとする修道士たちによる宣教の歴史を共有しています。南米の先住民も日本のキリシタンも、一見ローカルな事象でありながら、グローバルな動きへとつながる広がりを持っているのです。宇都宮大学国際学部の特色は、私たちが国際社会へとつなげてくれる多種多様なアプローチに出会えるところだと考えています。そんな魅力的な組織の一員になれたことを嬉しく思います。よろしくお願ひ申し上げます。

（2018年12月03日原稿受理）

◎ 平成30年度第1回各学部等同窓会連絡協議会報告

2018（平成30）年10月1日（月）午後4時から、宇都宮大学UUプラザ2階「コミュニケーションフロア」にて、平成30年度第1回各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は石田朋靖学長・藤井佐知子理事・茅野甚治郎理事・池田宰理事・佐藤規朗理事・佐々木一隆 国際学長・伊東明彦 教育学部長・阿山みよし工学研究科長（代理：入江晃亘）・夏秋知英農学部長・の大学側9名と事務局担当者4名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・増渕茂泰 教育学部同窓会会長・竹井誠 同副会長・橋本和英 同副会長・清水由行 工学部同窓会会長・上澤和彦 同副会長・松澤康男 農学部峰ヶ丘同窓会会長・田坂聡明 同理事長の同窓会側9名でした。議事内容は、協議事項として、1. 今後の同窓会組織のあり方について、2. その他。各学部等同窓会からの活動報告・要望等として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 第5回宇都宮大学ホームカミングデー実行委員会（第1回）報告

2018（平成30）年11月19日（月）午後2時半から、宇都宮大学UUプラザ2階「コミュニティフロア」にて、第5回宇都宮大学ホームカミングデー実行委員会（第1回）が開催されました。出席者は藤井佐知子理事・阿部好子企画広報部企画広報課課長・辻浦清志総務部総務課課長補佐・宮地智一学務部学生支援課課外活動係長・小澤好則地域デザイン科学部総務係長・出羽尚国際学部准教授（欠席）・飯島透国際学部総務係長・新井恵美教育学部准教授・西慶枝教育学部総務係主任・長谷川まどか工学研究科教授・岡英一工学部事務長・福井えみ子農学部教授・室井昭夫農学部総務係主任・志村なぎさ国際学部同窓会副会長・土屋伸夫国際学研究科同窓会会長・竹井誠教育学部同窓会副会長・清水由行工学部同窓会会長・小笠原勝農学部峰ヶ丘同窓会常任理事・担当：本橋宜久企画広報課企画調整係長の18名でした。議事内容は、

1. 第5回ホームカミングデー概要について、
2. その他。がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 読売新聞 朝刊（平成30年5月26日発行）31面に、「宇大4研究科統合へ」と題して、「大学院 文理越え人材育成強化」の内容で**地域創生科学研究科**の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊（平成30年9月7日発行）5面に、宇大大学院「4研究科統合 文理融合を推進」と題して、**地域創生科学研究科**の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第47（平成30年11月20日発行）8-9面に、「OB. OG. INTERVIEW」コーナーで「笑顔でがんばっています！ー旅行業界の最前線よりー」のタイトルで株式会社エイチ・アイ・エス 東北営業販売グループ 秋田アトリオン営業所勤務のコンサルタント**白井聖香**さん（2016年国際文化学科卒業生）の記事と取材者の国際社会学科4年**小畑晋吾**さん・国際文化学科4年**大川裕**さん・国際文化学科4年**上遠野亜衣**さんのコメントが掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊（平成30年3月15日発行）3面に、宇大チャレンジ奨学金1年「給付にできる学生たち」と題して、「バイト減らしボランティア」と「復興支援など学業と両立」の内容で国際学部4年**緑川沙智**さんの記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊（平成30年5月22日発行）5面に、JR宇都宮駅「電車待ち時間にもてなし提案へ」と題して、「宇大生、外国人にアンケート」の内容で**栗原俊輔**先生の記事や3年**与那覇利香**さんのコメントが掲載されました。

○ 刊行案内

1. 下野新聞新書 12 宇都宮大学国際学部編『多文化共生をどう捉えるか』（183頁）が、下野新聞社から2018年10月17日に刊行されました。
2. **ゲルガナ イワノワ**さん（国際学研究科 修士課程 国際文化研究専攻 第2期生）が米国・コロンビア大学出版から“Unbinding The Pillow Book: The Many Lives of a Japanese Classic”を2018年11月に刊行されました。（ISBN:9780231187985）

研究室訪問 50 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

博士録 46 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。今回は投稿予定者から投稿の辞退がありましたので掲載を見送ります。

知究人 35 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 28 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「ガーナの稲作普及」

藤田 達雄

「農業を集約的に行うなど、とんでもない！」

ある郡で、これからまさに集約的な農業技術を普及するための研修会を開こうとしていた冒頭で、来賓として招いた行政のトップにいきなりこう切り出され、出鼻をくじかれた。彼の言い分はこうだ。「気温 30℃を超える炎天下、鍬一本で荒地を耕し、畦を作るために土を盛ってならず。そして、種を播き、延々と続く除草作業。そんな苦行を農民に強いることはできない」。確かに灼熱の太陽の下で働くことは、本当に厳しい。しかし、だからこそ、厳しい労働に見合うリターンを得るべきではなかろうか。

宇都宮大学農学部を卒業後、青年海外協力隊を皮切りに 30 数年間、国の内外で農業普及に携わって来たが、任国の社会状況はそれぞれ異なり、援助の潮流も変化し続けている。現在従事している JICA「天水稲作持続的開発プロジェクトフェーズ 2」は、ガーナ 2 州の 35 郡に稲作技術を普及する技術協力プロジェクトであるが、それに係る費用は、ガーナで進められている地方分権化政策に沿って、地方自治体（市・郡）の予算を使って実施することが求められている。しかしながら、これまで海外ドナー頼みであった資金の手当てを、自前で行うことが求められた自治体は戸惑いを隠せず、これが冒頭の否定的な発言を産んだもう一つの理由とも考えられる。

そのような状況で、稲作栽培のコンサルタントとして成すべきことは、プロジェクトの技術パッケージが、自治体にとって自前の予算を使ってでも普及するに値することを示すことではないかと考えている。

日本では当たり前のように使われている技術が、ガーナではまだまだ普及していない。例えば、稲種子の塩水選（一定の比重の塩水に種子を入れ、水底に沈んだ充実した種子を

選別する)や温湯種子消毒などの基本的な技術によって、稲の生育はぐんと旺盛となり、また、農薬を使わずに種子消毒が可能となり病害を防ぐことができる。

さて、冷や水を浴びて始まった研修ではあるが、こうした農業技術の普及の成果は如実に現れた。その年、1 エーカーのデモンストレーション圃場で、日本並みの収量を上げることが出来たのである。慣行法の 4 倍程の収量に相当し、これでどうやら関係者の信頼を得ることができたようだ。技術の向上によって成果が保障されることを実感してもらえば、過酷な労働環境の中にも意欲は芽生えてくると信じている。

<https://www.jica.go.jp/oda/project/1400294/field.html>

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第2期生)

(2018年12月10日原稿受理)

海外留学今昔 25 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「モンゴル留学体験記」

折山 直俊

私は2017年9月から1年間ほど、モンゴルの首都ウランバートルにあるモンゴル人文大学へと留学していました。私がモンゴルへ留学した理由としては、現在私が第二外国語として勉強しているロシア語と同じキリル文字がモンゴル語で使用されていることに興味を持ったこと、さらにはロシアや中国、韓国等周りの国々から多くの影響を受けているモンゴルの生活、文化にも興味を持ったことなどがあげられます。

私が通っていたモンゴル人文大学はウランバートルの中心部に存在する大学で、国際関係学部のほかには外国語学部、経済学部などがあります。私はその国際関係学部の学生として1年間授業に出ていました。モンゴル人文大学は宇都宮大学と提携を結んでいますが、私が提携を結んで以来初めての留学生ということもあり、先方の大学関係者の方々から手厚いサポートをしていただきました。

多くの日本人は、モンゴルと聞くと草原が広がりゲルがあつて馬がいるといったイメージを抱く人が多いのではないかと思います。事実、私がモンゴルに行くということを周りの人に報告した時「道路や建物はあるのか」「電気は通っているのか」という疑問を投げかけられました。私もほとんど情報を持たずに出発したため、到着するまでは多くの不安がありました。しかし首都ウランバートルの市内に行ってみればそのようなイメージは完全な誤りであったことがわかります。市中には建物が立ち並び、道路は多くの車で常に渋滞しています。日常生活についてもスーパーや市場には外国からの様々な輸入品があつたの

で、生活必需品が買えずに困るということはあまりありませんでした。しかし、ウランバートルの外は多くの人が想像する「モンゴル」のイメージ通りです。すなわち馬や牛があちこちにいてゲルが建っており人々は遊牧生活をしている、このような光景をいたるところで見かけることができます。

派遣先の大学について、私は国際関係学部の授業のほかには主に外国語の授業を受けていました。私が主にかかわっていた学生は国際関係の学科の学生及び日本語学科の学生だったためおおむねのコミュニケーションは取れるものの、細部を理解しあうのには苦労しました。そのため、自分の語学力不足を痛感しました。それと 1 年間彼らと交流してわかったこと、それは彼らが細かいことを気にしないおおらかな性格だということです。深く考えなくても何とかなるだろうという明るい気性のため、常に毎日を楽しく過ごしていました。それと、日本に興味を持ってきている学生も大勢いました。日本語学科の学生のみならず一部の国際関係の学科の生徒たちも第二外国語として日本語を勉強しており、そういった学生たちにも多くのことを助けられました。

学生生活中にこのような貴重な体験ができたことをとてもうれしく思います。この体験記がのちにモンゴルへ行く人の助けになれば幸いです。

最後に、留学に関して様々な手続きをしてくださった宇都宮大学の関係者様や留学生交流課の職員の皆さま、およびモンゴル人文大学の関係者各位へと感謝の意を表します。

(国際学部 国際社会学科 第 4 年次在校生)

(2018 年 6 月 22 日原稿受理)

「イギリス留学体験記」

菅原 笑

2017 年 9 月から約 10 カ月間、イギリスのセントラル・ランカシャー大学に留学していました。イギリスはアイルランド、イングランド、ウェールズ、スコットランドと 4 つの国から構成されています。一口にイギリスと言っても、これら 4 地域では伝統衣装や言語など文化にもかなり違いがありますし、国内でも訪れる場所によって持つ性格が異なる興味深い国です。

留学先大学があるプレストンはイングランド西北部にあるランカシャー州の一つの町でした。留学先の大学は在校生が約 3 万人いて、町に住むほとんどの人は学生という小さな町でしたが、そこでの生活を通して特に深く考えさせられたことが 2 つあります。まずはホームレス問題です。いくら小さな町とはいえ、町の中心に行くと道端にたくさんのホームレスの方々がありました。多くの人が道端に座り「Change please.」と声をかけてきました。日本ではあまりホームレスの方々にお金を渡すことは良いことではないと考えられていることのほうが多いと感じますが、イギリスではお金を渡す人が少なくありませんでした。これに関してどちらが良い悪いという判断はできません。しかし日本人とイギリス人の対応の違いを見て、国が異なれば「支援」の形や支援そのものへの考え方も大きく変わ

るということに改めて気付かされました。

もうひとつ深く印象に残っていることは、LGBT についてです。以前よりは日本でも改善されつつあるように思われますが、まだまだ LGBT の方々が気軽に公表できる環境ではないと感じています。一方イギリスで出会った友人たちは自らが LGBT であることなどを隠すことなく生活していたり、例え体つきや声が男性または女性であっても自分の好きな服やファッションを楽しんでいたりと、自分らしく生きている方が多かったように記憶しています。当人たちだけでなく、周りの方々も LGBT であるという事実をほぼ当然のように受け入れ、服装や心の性などが身体的な性と異なっても好奇の目で見たりからかったりすることはほとんど見られませんでした。もちろんすべての人が LGBT に寛容であるということではないかもしれませんが、日本で見るとよりずっと多くの方が自分らしさを隠すことなく表現していたのがとても印象的でした。

今回の留学では上記の話題を始めとしてたくさんの人々との交流や文化の違いに触れることで視野が広げられ、「当たり前」とは何だろうと自問する機会が多くありました。自分の「当たり前」の尺度で物事を判断することをやめることで、多様な考えを受け入れられる柔軟な思考力が以前よりも身についたと感じています。この交換留学で学問的な知識を身に付けたり語学を向上させたりできたことに加え、人としてより善く生きていくために必要な人間性を少しでも磨けたことはとても大きな収穫でした。結びに、今回の交換留学を支えてくださった本学関係者の皆様、先生方、先輩、家族、並びに留学先であるセントラル・ランカシャー大学の関係者の皆様に心からの感謝の意を表し、私の留学体験記とさせていただきます。この度は大変貴重な機会を与えて頂き、本当に有難うございました。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在校生)

(2018年8月25日原稿受理)

学生サロン 16 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 13 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「ふるさとから世界を見る」

川名 文

「ふるさとから世界を見る」これは、国際学部を受験した時の小論文のお題です。「井の中の蛙になりたくない。世界をこの目で見て、いつかその知識を活かして故郷に帰り、

地元に貢献したい」高校3年生だった私は、こう書きました。

あれから23年。私は地元の宮崎県で通関士として働いています。18歳の私に、「まあまあ夢は叶ってるよ」と伝えたいです。通関士は貿易業界唯一の国家資格で、毎年10月に試験があります。大学生で受験する人もいますので、是非CHECKしてみてください。35歳を過ぎての猛勉強は、翌日にはそのページを勉強したか忘れていくくらい散々でしたが、どうにか2年目で合格しました。

自分が携わった貨物が海外に向けて出港していく時、我が子のような気持ちで見送ります。税関検査や、植物や動物検疫に関する貨物の検査にも立ち会います。男性に混じってフォークリフトの免許も取りました。クルーズ船が到着すれば入出港の手続きを手伝ったり、体調の悪い船員さんを病院にアテンドしたりします。子ども達に貿易について講話をしたり「全国女性通関士会議」にも参加しています。この業界に興味を持って下さる方が増えればいいなと思っています。2017年には在宅勤務も可能となりましたので、近い将来、男女問わずワークライフバランスの充実に期待ができそうです。

宇大にいた時は、家庭教師や栃木県庁でのバイトに明け暮れ、休みの度にバックパックを持って海外へ出かけました。宿も決めずに東南アジアを旅したり、アメリカをグレイハウンドバスで南下したり、ドイツでは世界中の学生とワイン園の草むしりをしました。教免取得を目指す友人もいましたが私は無頓着でした。資格の一つでも取得すべきだったと少し後悔しています。栃木が生んだ？大手家電量販店に就職したところ、配属先の店舗近辺は外国人が多かったので、その対応で英語は上達したように思います。慣れない日本で過ごす方々をお手伝いすることにやりがいを感じました。どこにご縁があるか分かりません。合わないと思う環境でも、新たな発見があり、人生観を変えることもあります。

紆余曲折あったものの、宇大時代の思い出や接客業で学んだことは、今の私の糧となっていますし、あれこれ仕事をするうちに、通関の道を志すこともできました。今は、最愛の娘と東南アジアを時々旅したり、趣味のランニングを楽しんでいます。

学生時代は、あっという間です。自分の人生について真剣に考え、目標を定めてコツコツ努力すれば、何でも実現できると思います。人生一度きり。何か挑戦するのに遅いということはありません。夢がある人はその為に何をすべきか考えて努力し、夢がまだ分からない人は、気負うことなく、いつかその夢の花を咲かせる為に、今はコツコツ種を蒔こうではありませんか。宇大国際学部の学生の皆さんの将来に幸多かれと願っています。

(国際学部 国際文化学科 第2期卒業生)

(2018年11月24日原稿受理)

フォーラム 2018年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「恩返し」

鄭 仁淑

皆さん、こんにちは！

宇都宮大学大学院国際学研究科国際文化研究専攻を2006年3月に修了しました韓国の鄭仁淑(ジョン・インスク)です。指導教官は中村真教授で大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

私は1999年、旦那と2歳の娘を連れて日本に来て、最初は日本語の勉強から始め、下の息子を出産してから大学院に進学しました。子供も二人いたし、旦那と私二人とも大学院に通うのは時間的にも経済的にも大変なものでした。3時間おきのミルクやりをしながら夜が明けるまでレポートを書く日も多かったです。学費、生活費のためバイトもしなければなりません。経済的な理由で私は学校を辞めようかと夫に相談したこともあります。その時夫は何があっても勉強だけは続けようと言ってくれました。その時私は運よく米山の奨学生になれました。私達の家族にとって米山は天から降りてきた命綱のような存在でした。米山の奨学生になったお陰で二人とも無事修了し、今は米山学友会(米山奨学金をもらった人達の集まり)の一員として活動しています。

日本にはお返しをする文化がありますよ？誰かに何かをもらうとお返しとって、もらった人に必ずお返しをしますよね。とても素晴らしい文化だと思います。私も米山奨学会のロータリアンの人達にももらったこの恩をいつかは必ず返したいと思っています。でもどんな形でお返しをすればいいのでしょうか？

韓国には「내리사랑(ネリサラン)」という言葉があります。これは親の愛、つまり親の子供に対する愛を意味する言葉で、水が高いところから低いところへ流れて行くように愛というの親から子へと流れるということです。子供が親からもらった愛を返そうとする時は、親はもう歳を取って待っていてはくれません。それで子供は親からもらった愛をまた自分の子に返す。その子はまた自分の子に返す。このように愛というのは上から下へと下っていくという意味なので「내리사랑(ネリサラン)」と言うのです。この「내리사랑(ネリサラン)」は家族だけでなく韓国の社会ではどこでも見られます。会社では上司が部下に、学校では先輩が後輩に、男性は女性に… こうして恩はもらった人に返すのではなく下に下りながら返されていくという事です。

私達家族は今まで日本で生活しながら色々な人々に多くの愛をいただけてきました。家

族でもなく、親戚でもない私達家族を心配し、愛して下さった多くの方に、恩返しをしなければならぬと思っております。日本式の恩返しと韓国式の恩返し両方をうまく活かした恩返しができるようにこれからも頑張っていきたいと思っております。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第6期修了生)

(2018年12月10日原稿受理)

特別寄稿

「2018年度国際学部同窓会理事会および総会・懇親会報告」

理事 豊田 君夫

深秋の候、皆様にはお健やかに過ごしのことと存じます。

芸術の秋ということもあって、宇都宮大学学園祭に合わせて、11月24日にて宇都宮大学国際学部棟で国際学部同窓会理事会および総会・懇親会を学園祭に負けじと熱気に溢れ盛大に開かれました。

恥ずかしながら小生、在学中に一度も学園祭に行ったことが無くて、こんなに素晴らしいのを知っていたら、間違いなく毎年参加していただろうと思う今日この頃です。

さて、総会には国際学部長佐々木一隆先生、国際学部同窓会長吉葉さん、副会長志村さん、副会長行澤さん、丹治さん、田中さん、高野さん、森さん、他多数御臨席されました。内容としましては、第9期の事業報告、第10期の事業計画、いずれも全員一致で了承されました。そして、第10期は理事鮎澤小百合さん、監査小牟田真理子さんが新任され、13名体制となりました。来年は同窓会発会20周年、国際学部設立25周年、宇都宮大学創立70周年という節目の年で、2019年11月23日に第5回ホームカミングデーを正式に盛大に、そして、豪華な記念品を製作することになりましたので、皆さん大いに期待して下さい。最後に、3C基金より、今とちぎマーケットで販売してるTシャツ@2,500、トレーナー@3,000を購入することで1枚につき@500が3C基金に寄付されるということなので、皆様ぜひお知り合いの方や同窓生に紹介して協力して下さい。因みにサイズはS,M,L,色はホワイト。僕が着れるサイズがないのが残念です……。

次回の理事会開催は2月です。又皆さんと会えるのを楽しみにしております。

*なお、写真は国際学部同窓会HP「コミュニティ広場」からご覧いただけます。

(国際学部 国際文化学科 第2期卒業生)

(2018年12月05日原稿受理)

お知らせ

2019年11月23日(土)の午前中に宇都宮大学創立70周年記念イベントと企画展「宇都宮大学の歴史」が開催されます。午後から第5回宇都宮大学ホームカミングデーが各学部で開催されます。ぜひ、多くの同窓生の参集をお待ちしています。来年の手帳に予定を入れておいてください。よろしく申し上げます。

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。第 6 号の主な内容は以下の通りです。1. ご挨拶 2. 引っ越しのお知らせ 3. 新メンバー紹介 4. 連載コラム No.6 タイの昨今—阿吽の呼吸—大畑美優紀 / 狙えインスタ映え！？ 第 2 回アジア取材雑記 ミャンマー“8888”の重み 谷澤壮一郎 / 今旬のイチマイ 第二回 ともに感じる東南アジア 雨のバンコク 信号待ちの交差点 本間みずほ 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていたくことを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 28 号の内容は、1 イタリア ノルウェーをモデルにクオータ制導入 2 EU 支部だより —The World's 100 Most Powerful Women です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

● 来年は節目の年になります。大学院改組にともなって、国際学研究科博士前期課程国際社会研究専攻・国際文化研究専攻・国際交流専攻が地域創生科学研究科修士課程社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディープログラム（修士（国際学））と多文化共生学プログラム（修士（学術））に改組されます。2020 年には国際学研究科博士後期課程の入学者のみが知求会会員となります。従って、当会の方針では今年度入学者の国際社会研究専攻 20 期生・国際文化研究専攻 20 期生・国際交流専攻 15 期生が最後の入会者になります。今後は当会と連携しながら、新入生による新しい同窓会組織を模索していただく予定です。

さて、知求会ニュースも、無事 17 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com